

特集にあたって

滋慶医療科学大学院大学 米 延 策 雄

巷間に腰痛に関する誤解は少なくない。「腰痛の85%は原因不明」とか、「腰痛の原因は頭にある」は最近のマスメディアやネットに出てくる誤解、曲解の例である。前者には、特異な治療法が適応となる可能性がある腰痛は15%くらいであり、それ以外は原因を詮索するよりも治療や不安解消を優先しようとの意図が背景にある。後者では、症状（あるいは疾病）は社会に投影されて病気となる。つまり、生物学的に損傷をもつだけではなく、病み苦しむ（勞られ慰められる）人と認められることで患者となるとの見方を示したものである。しかし残念ながら、一部のメディアは「原因不明の85%」や「心理的」にスポットライトを当て、かえって不安や混乱が増しかねない状況である。

誤解、曲解の背景には、われわれが腰痛の病理病態を明確にし得ていないことも一因としてある。腰痛が発生する組織として、筋・筋膜、椎間関節、骨、そして、これらの中では比較的新しいが、椎間板が挙げられてきた。椎間板腰痛起因説が唱えられ始めて以降、多くの研究が椎間板に注がれた。しかし、椎間板は腰痛（あるいは頸部痛）の暗黒大陸といわれるように、依然として不明な点が多い。感染症や腫瘍性疾患の病理病態を明らかにしてきた20世紀に進歩した手法と思考法、たとえば病理学、生化学あるいは画像診断学は、痛みという感覚や情動を明らかにする方法としては未熟であった。

腰痛の成因が不明といっても、これに苦しむ人がおりその解消を求めれば、必然的にどうにかしようとの考えは、その技術の依って立つ所によらない。古くからある腰痛にさまざまな伝統的な手法が使われているのはご承知のとおりである。そして、科学性に基盤を置くとしている医学でも、短絡的に解決を図ろうとした歴史は最近にもある。アイデア段階で終わった人工髄核、試みにとどまった椎間板内電気温熱療法、結果が問われている人工椎間板。腰痛をめぐるのは、この未完成の治療先行の考えが時に混乱を増幅している。

超高齢社会となって脊椎の痛みに悩む患者は増加している。人類が初めて経験する超高齢社会を切り開くためには、これへの対応が欠かせない。幸い、痛みや椎間板に関わる病理学、生化学あるいは画像診断の新しい手法が開発されてきている。本特集では、椎間板性疼痛に関する知識のup to dateを図り、臨床医として脊椎由来の痛みの診療を進めるとともに、社会に正確なメッセージを発信していきたい。